

巻頭
言

Too Slow Too Late



| 会長 山崎 學

相変わらず新型コロナウイルス（武漢ウイルス）が猛威を振っている。思えば当初の「ヒト－ヒト感染はない」とした中国とWHOの口車に乗せられて初期消火を間違えたのが始まりだった。その後、ダイヤモンド・プリンセス号では水際で阻止できると横浜港に係留して船内隔離を行い、結果として712人の船内感染者を出した。そうこうしているうちに第1波の流行が始まり、1回目の緊急事態宣言の行動制限で下火になったところで経済活動を再開したことが第2波につながり再び行動制限、下火になったところで経済活動再開して第3波が襲来し、再度の緊急事態宣言で感染者数が下げ止まらないのに待ち切れず経済活動を再開し、英国型・ブラジル型・南アフリカ型・フィリピン型等の変異株が急速なスピードで拡がり第4波が襲来した。またまん延防止等重点措置、緊急事態宣言と繰り返すことになる。

最初は甘く見ていたコロナウイルスの正体も分かってきた。多くの感染者は無症状で経過するが、免疫系に作用してサイトカインストームを起こして梗塞性の血管障害が生ずることにより、急性増悪に至る例も報告されている。特効的な治療薬はなく、米国で承認されたレムデシビル、日本で開発されたアビガン、疥癬の治療薬として開発されたイベルメクチンが感染初期のウイルスの増加を抑制するといわれているが、効能は定かではない。

決定的な役割を期待されているワクチンについて、国はファイザー社が開発したmRNAワクチン、アストラゼネカ社が開発したチンパンジーのアデノウイルスをベクターに使用したワクチン、モデルナ社が開発したmRNAワクチンを購入することを決めて契約したが、世界的大流行と相まってワクチンの到着が大幅に遅れ、おまけに接種の優先順位を決めただけで地方自治体に丸投げしたためにワクチン接種が大幅に遅れ、先進国では接種率は最低で、発展途上国並みに甘んじる状態である。集団免疫を獲得するには国民の70～80%がワクチン接種を済ませなければならない。このままでは東京オリンピック・パラリンピックを安心な日常生活下で行うことは事実上不可能な状態にある。

ファイザー社との間で6千万人分のワクチン供給を受ける仮契約をしておきながら、本契約を結ばずにいてワクチン到着が大幅に遅れてしまった。このワクチン接種の遅れで失われなくてもよかった命を今日も失っているのに、政治家・官僚の言動に危機感を感じられない。政府のコロ

ナ対策分科会にしても町のおばちゃんレベルの会議結果を報告しているのではとても国民の支持は得られない。

今危惧しているのはコロナ禍で出生率が大幅に減少し少子化に歯止めがかからなくなっていることである。一説によると中国では20%減、我が国では8%減といわれている。さらにコロナ不況によって若年層の収入が激減し、結婚・出産に後ろ向きになり、経済的ストレスでうつ病・自死が増えている。また在宅ワークが定着することにより、社会の枠組み自体が大きく変化し社会のIT化が急速に進むことが予想されている。その結果、家族のあり方、働き方といった人間の本質に係る社会活動が大きく変化することになる。このような社会的な激震の中で精神科地域医療の変化にどのように対応していくのか、会員の知恵を結集していかなければならないと考えている。